



日本の色彩 ～色のルーツをたどる～

難波めぐみ (なんば めぐみ)

郡山女子大学 家政学部 人間生活学科
教授



1. はじめに

1856年（日本では幕末の頃）ウィリアム・パーキンによって最初の合成染料が偶然発見され「色彩」は大きく変化をしてきました。それまでの日本における「色彩」は、例えば、江戸中期以降、町人文化で芽生えた「粹」や「通」といった美意識の中で、茶色や鼠色が当時の流行色となります。また、それより前の南蛮船の往来の頃には、猩猩緋しょうじょうひという船載の毛織物を真紅に染めあげた陣羽織が、戦国時代の武将の心をつかんでいたということは有名な話です。さらに、『源氏物語』や『枕草子』に描かれている装束には色の決まりが存在していました。私は、日本の色彩文化、特に「赤」の色表現に使用される植物性染料の紅花や蘇芳すおうを中心に色のルーツをたどる研究を進めています。

2. 色材ルート

現在までの紅花ルートは、①中国の長安や洛陽からパミール高原経由、西アジアからヨーロッパに至る道と、②モンゴルから黒海を通過してヨーロッパに至る草原のシルクロードの道とされています。その中では、原産地をエジプト、アラビア、エチオピアとし、中国には2世紀頃伝来したとされています。日本には推古天皇の御代（6世紀末～7世紀初期）に中国、或いは朝鮮半島を経由して到来後、日本本土で栽培され各地で定着した色

材であるとされています。一方、現在はヨーロッパから東南アジアを経由した海のシルクロードの研究が進められ、交易ルートが明らかとなる大きな可能性を秘めた研究となっています。もっとも、日本は海で囲まれているので「もの」が伝わるのは海路しかないのですが、それでも、早い時期に交流があり、色材が伝来していたことが確認されています。その伝来が中国大陸を経由したいわゆる陸のシルクロードであるのか、ヨーロッパから東南アジアを経由した海のシルクロードであるのかはまだ確認されていません。

3. 研究材料との出会い

近年の科学的分析技術の発展及び分析データの蓄積により、それまで判断が困難であった文化財試料などの顔料や染料等の色材が究明され、染色文化大系に変化が見えはじめています。私も科学研究費補助金¹⁾の助成をうけ、平安王朝宮廷装束の赤と琉球王朝宮廷装束にみる赤の色材を中世の海上交易品から探る研究を進めていますが、研究開始と同時に、運命的な出会いが訪れます。図1の琉球「紅型」(手前)です。この試料の入手によって様々な調査を実施し、研究は思いもよらない方向へ進むこととなります。最初に取り組んだのがこの試料の同型を抽出することです。国会図書館に出向き関連書籍を確認し、約2,000種類

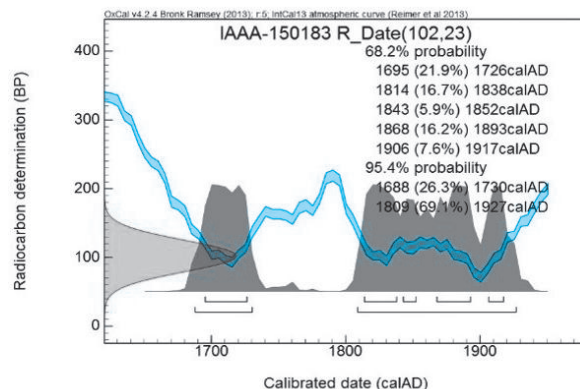


図1 難波所蔵紅型（手前）と国宝（奥）

ほど保存されている琉球紅型の確認作業に入りました。結局、見つからずあきらめかけていた時に、サントリー美術館で開催された「沖縄復帰40周年記念 BINGATA－琉球王朝のいろとかたち」展での書籍をタイミング良く手にいれることができました。その書籍の中に、18～19世紀に制作されたとされている少年用の冬の裕衣裳「国宝黄色地松皮菱に菊藤流水菖蒲模様衣裳」を発見します。それは、王家を象徴する黄色地で制作された試料でしたが、目視及び寸法分析の結果とても似ていたため、実際に確認する必要性が生じたことから、その試料を収蔵している那覇市歴史博物館を訪ね学芸員の方にお話を聞くとともに、実物の撮影を許可して頂きました。それが図1です。

直接見ても良く似ていると感じましたが、学芸員の方からも「他にも似ているものはありますが、その中でも良く似たものですね」とお話がありました。「紅型」は型を使用して様々な色を染めていきますが、そうすると、同型が人の手に渡って作成されたものではないかという疑問が生まれます。しかし、「王家のものは納品時に一緒に3枚の型（同時に3枚を彫る）を納品する。」ことなども聞くことができたことで、この試料は、国宝級の作品ではないかと推測することになります。国宝級に匹敵するスケールの大きな試料が手に入ったとドキドキしました。

この結果を受けて、次に取り組んだのが年代測定（AMS法）です。その結果、図2の分析結果が抽出され、試料の制作年代は17、8世紀の

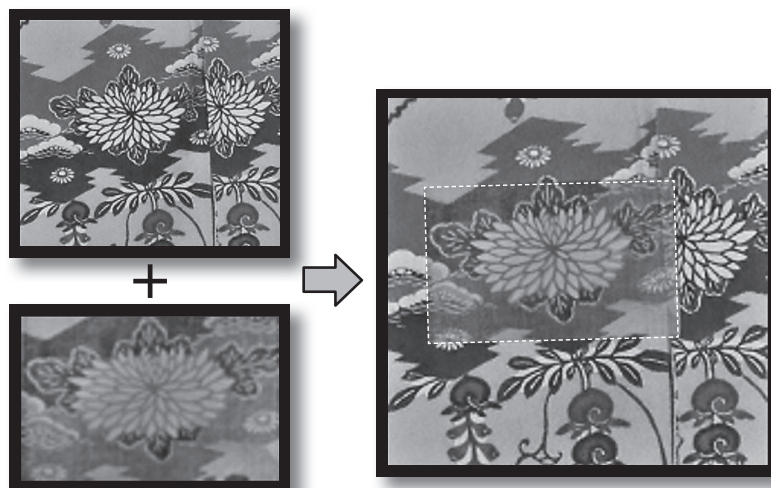
図2 AMS法分析²⁾

可能性も含め大凡19世紀前半と推定されました。

更に、目視や年代測定では型の判断が不足するため写真照合による分析を実施しました。私が所蔵している「紅型」を写真照合ソフトで薄めていき、国宝の「紅型」に重ね合わせていきます。文様の中で最も緻密な菊の花びらの数や花びらの向き、葉の形や葉脈を選び、照合を実施して観察したところ図3の結果になりました。

「国宝黄色地松皮菱に菊藤流水菖蒲模様衣裳」では、縫い合わせの跡が残され繊維に縀れが生じているため完全なる一致とは言えないものの、①菊の花びらの数、②菊の葉脈の線、③葉や菊の周りの線が全て一致したといえます。このことから、年代測定及び写真照合によって、私が所蔵している琉球「紅型」は、国宝「紅型」と類型であり19世紀前半に制作された可能性が極めて高い結果となったのです。

そうすると、手法を変えて分析すれば19世紀前半の色材を知る手掛かりとなるはずです。胸躍ら

図3 写真照合³⁾

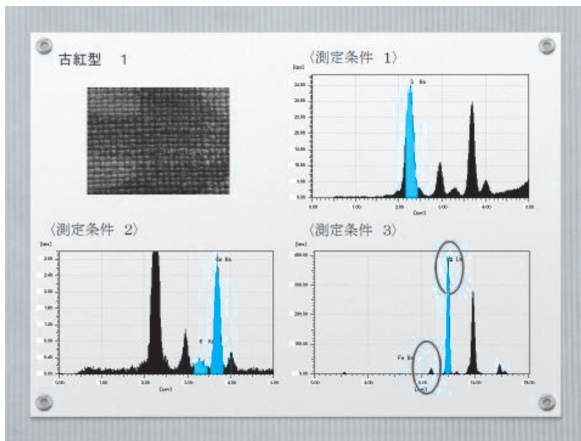


図4 古紅型蛍光X線分析結果⁴⁾

せて取り組むわけです。そこで次に、現在の分析手法で多く取り入れられている蛍光X線分光分析で分析を実施しました。その結果、図4（一例）が抽出され、HgS（辰砂）に由来する色であることが示されましたが、詳細な結果については今後を楽しみにして下さい。

1856年に合成染料が発見されていますので、この試料に使用されていた色材が明らかとなれば、制作年代を断定する手掛かりが更に増えることとなります。研究はまだ途中です。パズルのピースを組み合わせている状態です。

4. 研究の意義と今後

本研究は、中世の海上交易の実態から、蘇芳（蘇木）や紅花などの赤の色材を究明し、日本の染色文化の新大系化を目指すことにあります。交易品の蘇芳（蘇木）や「紅」、或いは、他の色材

がヨーロッパからアジアの海を經由してもたらされれば、現状の色材ルートに新たな可能性が加わることになります。また、琉球宮廷衣装及び日本の公家装束に使用された色材が明らかとなることによって、新しい染色文化の大系が形成される研究であるといえます。

現在の調査は、日本の海を越えた台湾です。これからさらに、貿易船の寄港地泉州や広州（中国）へ研究調査地を広げていく予定です。研究には、現地調査が大切な研究手法の一つですが、どこも暑くて湿度が高く体を慣らすのに苦労します。それでも、海を渡った人々の遙かな時を追いかけ調査できることは幸せなことだと思っています。研究は、様々な分野へと波及していくもので、私の研究が今後どの分野に繋がっていくか分かりませんが、夢を与えるものであって欲しいと思っています。

注

- 1) 文部科学省及び独立行政法人日本学術振興会が研究を発展させることを目的とした事業。一般に科研費と略称されている。
- 2) 株式会社 加速器分析研究所（福島県白河市）：¹⁴C-AMS装置（NEC社製）
- 3) 本学建築デザインコース長田城治講師に合成して頂きました。Adobe Photoshop elements14使用。
- 4) 地方独立行政法人東京都立産業技術研究センター：高感度蛍光X線分析計 SEA6000VXHS Finder（株式会社日立ハイテクサイエンス社製）

<プロフィール>

二松学舎大学大学院博士前期過程修了。修士（文学）。和洋女子大学文家政学部助手を経て、2000年郡山女子大学家政学部人間生活学科の講師として勤務。2018年度より教授として現在に至る。主な研究は日本服装史（特に、公家文化に見る染色技術と服装）。日本服飾文化学会理事。一般社団法人日本家政学会 色彩・意匠学部会委員。

【本内容に関して】

本内容は、1. 「平安王朝宮廷装束の赤と琉球王朝宮廷装束にみる赤の色材」JSPS 科研費 25350054（JSPS KAKENHI Grant Number 25350054）と、2. 「中世台湾、琉球の海上交易品赤の色材（料）に関する研究」JSPS 科研費 17K00769（JSPS KAKENHI Grant Number 17K00769）の助成を受けたものです。 **科研費**